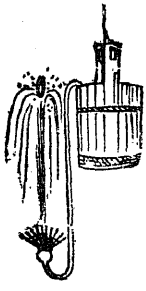
たるフレーベルは熱心に幼兒の性善說を主張して之を惡くするものは即ち敎育者であると迄云つて居るが併し此意味は大体に於ての議論で決して極端に信用す可きものではない。兎に角幼兒の遊戲は人生の諸活動、諸出來事の基礎若しくば萠芽と云ふものを悉く所有して居ると見ることは確に間違のないことである。從つて幼兒は遊戲に於て其天眞を發露し其自我を實現した時に玆に天與の個性は十分に發展することが出來るのである、と云はねばならぬ。是は取りも直さず一種の社會學的見解で自ら又一種の實現說である。

之を要するに遊戲なるものは、生理的基礎を有する諸種の衝動と並に此衝動の滿足より得られたる諸種の興味とを根據として發達したる幼兒の自發活動であつて幼兒は之あるが爲めに發達し、之をあるがために未來を準備し得るものであると云はねばならぬ。



育兒の經驗

自治自賴（其二）

光藤泰次郎

前に申した樣な主義で、養成して參りましたから、數へ年五つになつて、お茶の水の附屬幼稚園にはいつた其の當日から、一所に連れては參りますが決して誰もついては居りません。大小便其の他自分の事はふだん自分で始末しつけて居りますから少しも吾々は心配しませんでした。しかし如何に自治自賴の風に養成したからとて、矢張り幼兒の事であるから、隨分とも諸先生方にお世話をかけた事だらうと推察して居ります。そして其の多大の御苦勞に對しては、感謝の念に堪へないのであります。さて幼稚園入園の當日から、湯島天神町なる自宅に歸る道をよく敎へまして、三四日目から、電車道を横ぎる所まで見てやつて、あとは一人で歸るをさせならしました。所が最初の中は大人しく歸つて行きまして、少しも心配しませんでしたが。彼長男は始めて一人あるきを始めたと

ころから、雄心勃々として唯眞直に家に歸るを好みませんで、單騎遠征ともいふべき冒險を企てました。その冒險といふのは外でもない、日本橋區小傳馬上町なる某小學校に出勤して居る母を訪はうとの計畫でありました。彼は一二回母と共に其の小學校へ行つたことのある所から、多分電車道へついて行けば、行き得らるゝと考へたのでありましよう、湯島の聖堂の後から、街鐵の線路に添うて、神田小川町東明館の前まで行つて、あの邊をうろついて居つたといふを、とうとうおまはりさんのお世話になつて、神田警察署に參つて居りました。宅では母が先に歸宅しましたけれども子供がいつもの時間に歸つて來ぬのは、多分父の所に行つて居るだらうと、子供の歸宅の遲いのを少しも不審に思つて居なかつたのです。所が私が歸つて見たところ、歸つて居るべき筈の長男が見えませぬ。そこで大騒ぎいたしまして、やつと警察署に居るをがわかりまして、お禮を申しのべて連れて歸りました。ふだんから所番地はよく教へ込んでおきましたし、兩親の名もよく知らせておきましたけれども、おまはりさんにつれられて、警察署に行つたが爲、泣き出してしまつて、物の役には立たなかつたやうです。これからして自治自賴は宜しいが、しかし、子供が自已の力にあまる冒險をやるやうなことは、甚だ危險であるし、子供の物覺えは案外役に立たないといふをを深く感じまして、子供には深く訓戒を加へておきました。其の當座はよく謹愼して居りましたが、少し程經ますと。彼は亦もや第二の單騎遠征を企てました最初は街鐵へついて行つたから道を違へたのである、東鐵について行けば、間違はないといふので萬世橋の所に出で、須田町より、今川橋の所に參りました、今川橋の交番のおまはりさんが之を見て、所を尋ね、交番につれ行かうとせられたけれども、どうしてもきゝ入れませんさうでした。所が通りかゝりの麹町邊のさる親切なお方が、それを御覽になつて、わざわざ湯島天神町の宅へ連れて來て下さいました。それから重ねて深く訓戒をしまして、子供が單獨で遠征をするものでないと申し聞かせましたら、今度は二度失敗をしたのに

懲りたと見えまして、即ち自己の力を自覺したものと見えまして、それからは無謀な遠征なんかを企てるをはなくなりました。こんなくだらぬことを長くかくのは甚だ申し譯のない次第でありますが、子供をお持ちの御方が、子供の自治自賴を奬勵になるも宜しいが、しかし子供は時として自己の力にあまる冒險を企てるものですから、寸時も油斷はならぬ。又冒險心は必ずしも惡くはない。否惡くないのみならず、其の勇氣は寧ろ賞すべき點があると思ひますから、其の勇氣を挫折せず、よく自己の力を自覺して、相當のことを企てるやうに仕向けるが必要であるといふことの御參考までに申し上げたのであります。

智力の養成

私は痴鈍の子に限つて屹度數の觀念に乏しい。數の觀念に乏しい子は即ち痴鈍の子であると、平素考へて居りますので、どうか自分の子には十分に數の觀念を得させて、遲鈍でないやうにしたいと思ひまして、平生色々の方法を取りました。先づ第一番に數へ年三つになつて、片ことにとうさんかあさんをいひ始める頃から、あなたは幾つと聞く。最初は答へてもよし、答へないでもよし。否最初は答へられる筈はありませんから、かやうに疑問を發していて、あなたは三つと敎へながら子供の指を三本出させて他の三本を折り曲げてやる。讀者はそんな事は珍らしくない、世間で幾らもやつて居られるではないかと言はれるかも知れない。私も敢へて珍しいとは申し上げない、世間で普通行つて居られることであるが、しかし私は之を數多の方法の中の一とする點がやゝ異なつて居るかも知れぬ。敎育思想のある御方は、三つ兒に年齡は幾つなどゝいふ抽象的のことがわかるものか數の觀念を得させるにしても、他に適當の方法は幾らもあらう。かういふ仕方には贊成が出來ぬといはるゝ方もありましよう。一應尤の說でありますが、しかし子供の頭に數のことに就ての種子を植うることが出來ればそれで滿足であります。最初はわかつて子供が答へやうが、わからずにいはうが、そんなことは一切かまはぬと思ふ。朝に問ひ、晝に問ひ、晚に問へば、子供にいつの間にか自分の年

の記憶が出來、數に關する觀念の基礎が出來ます。第二番には數の觀念の基礎は實物殊に利害關係の切なるものより得易いと考へます所から、晩の定まりの菓子なり菓物なりを與へる時に、あなたは幾つほしいかときいて、さあ三つお取りなさい、とか、五つお取りなさいとか、澤山の中より選び取らせるか、或はさあこれだけあげましよう幾つありますかといつて數へさせる。兎に角與へる所の菓子なり菓物なりを利用して數の觀念を確實にさせやうとつとめるのであります。此の方法を實施しますには一寸躊躇したをがあります。それはあまりに數の觀念が明確になりますと、與へる所の菓子なり菓物なりが一寸でも同一でないと、やれ私のは幾つ多いとか、幾つ少いから、もつと下さいとか、思想が下品になりはしやしまいかと心配しましたが、しかし、多勢の子供に皆均一に與へるやうにすればその憂はなからうし、塲合によつては兄さん故に多くやるとか、小さいもの故特別に澤山與へるとか子供の尤もと思ふ理由さへつけてでやれば滿足せぬをはなからうと考へて實行

しました。日本在來の思想では金のお勘定も知らず、お米のなる木も知らないといふのが、上品で鷹揚で好ましいをであるとやうに考へられて居たやうですが、それでは將來の社會に處しては到底失敗を免かれまいと考へまして、利害關係なり、數の考なりは非常に精確に鋭敏であるが、しかし他の思想を以て、上品に高尚にさせるをが出來ると考へまして、右のやうに實行しました、之れから第三番には毎夜定まりの運動をするときに、一つ二つと數へて數の呼び方を敎へるのです。數の呼び方を敎へ込むのが數の觀念を確實にする基礎であると考へまして右のやうに致しました、しかし子供には少しも數の呼び方を敎へるのだとも何とも申しきかせるのではありません。そら運動をしてやらう、一つ二つ三つ四つと最初には四つ位まで幾度も繰り返して唱へまして、さ一所に言ひなさいといへば、直に口癖に覺えてしまひます。それから範圍をひろめまして十位までにし、それが出來ると今度は一二三四の呼び方に改め、これが出來るやうになればワン、ツー、スリー、フォ

アーに改め、何れも何れもよく熟するやうにさせる。此の方法を用ひると、子供はちつとも苦勞を覺えずいつの間にか、數の呼び方になれてしまつて、指を折つて數へるをも又實物に當つて數へるをも容易く出來るやうになります。幼稚園に參ります頃には大抵二十までの數へ方は出來るやうになります。その他體操の眞似をします時にも此の數の呼び方をやらせます。第四番に毎朝の冷水摩擦をする時に手足は凡そ五十、背と腹とは凡て百位ですりますが、其の時にも數を呼ばせます。又湯に入つてすります時、或は湯に入つて沈んで出やうとする時、其の他苟も機會があれば之をのがさず利用して數の呼び方を練習させます。子供は自分で數の呼び方を習つて居るのだとの意識なしに覺え込んでしまひます。第五番には折々數を逆に數へさせるをいたします。順數のときは子供は無意識的に學ぶをが出來ますが、逆數の時には一寸機會が少く、又無理になり易い傾がありますが、最初は菓子菓物を與へる折、實物を出して、さあこゝに皆で幾つあるか、この中あなたに一つあげやう、幾つのこりますか。さああなたにも一つあげやう、幾つのこりますか、といふ風にします。しかし逆數は實物についてやるやうでは効がない、どうしても抽象的に、出來なくてはだめであるから、順數がどし〳〵精確に出來るやうになれば、こちらから問を出して答へさせるやうにします、順數の方が確に出來さへすれば、逆數はさほど熟練させるに困難なをはありません。第六番に數の觀念を明確にさせるには、順數逆數が如何によく出來てもだめです。二數を比較して其の多少を知るをに熟させなくてはならぬ。之をするには例の菓子菓物を與ふる時に之を利用しますし或は兄弟互の年を比較させます。そして又かういふ場合には抽象的に數のみを比較させます。尤も範圍は十以下の數即ち兩手の指を利用し得るものに限りまして、成るべく頭をいためぬやうに極めて易い所から始めます。かやうな事は一度や二度位やつたとて効のあるものではありません。又一度や二度精確に計算が出來たとて、それで滿足すべきでありません。苟も機會さへあれば幾度も幾

度もくり返して、迅速に精確に出來るやうにしむけなければなりません、之を要するに、家庭に於ては算術の教授をする必要はありませんが、しかし全然數に關する觀念を開發するを怠つておくも誤りかと思ひます。唯數の觀念を開發しておいて、小學校の教育を受くる際に、困難を感じないだけの注意をしておくを必要かと思ひます。曾て尋常科初年級の生徒を扱つて見たをがありますが、數に關する觀念の開發の度が入學當初既に大へん違つて居るを及び最初よく計算の出來るやうなものは、特別の事故が發生せぬ限りは、いつまでも樂々と學び得るに反して、最初より劣つて居るものは、始終骨が折れるばかりでなく、又いくら骨を折つても、とても他の優秀なものに及ばない。それのみならず、數の觀念に乏しいものは、何をやらせて見ても、幾分遲鈍であるやうに感せられたから、其の原因は何處にあるだらうと考へ見た。成る程幾分は先天的に原因するものもあらうけれども、其の大部分は、家庭に於て、數の觀念の培養を怠つて居るに原因するものと考へまして

さてこそ前に申し述べたやうな方法をとつて見たのであります。特別に數を教へるとか算術を授けるとかいふやうなをしないで、日常の規定を行つて行く間に、副似的に數の觀念を開發するをが出來る。長男の如き此の四月に一つ橋の小學校のお世話になるをになりましたが、もはや數へ方は大抵百位まで間違はずに出來ますし、二數の比較ならば、十以下の數については、間違なしに其の差を計算し出すをも出來ますから、あの分にては、大勢の學友の間に立つて、數の計算については、さう劣つて仕方がないといふをはなからうかと思ひます。後來如何樣に發展し行くかは分りませんが、現在の有樣では、兎に角平均以下に落ちて苦しむといふをはあるまいかと考へて居ります。以上のお話が幾分なりとも、子供の教育に腐心せらるゝお方の參考になれば、實に私の本懷であります。(まだある)